武陵桃源・アルカディアーの系譜

三石善吉

目次

(一) 陸沈―隠逸のアルカディアー
(二) 陶淵明のアルカディアー期
(三) 陶淵明像の変化
(四) 国内亡命アルカディアーの系譜

(一) 陸沈―隠逸のアルカディアー[1]

秦朝による戦国統一（紀元前二二一年）以降清朝の滅亡（一九一一年）に至るほぼ二千年間、中国の政治は、一方

では、カリスマ的君主制原理（武の原理）による伝統の絶え間ない破壊、腐敗堕落せる政府への「革命」と、他方では、それにもかかわらず、その君主体制の絶えざる日常化によって各王朝は伝統そのもの（儒教的な文の原理）に常に立ち戻っていく。儒教的教養をもつ行政幹部は、古典と歴史に拠りつつ、君主・王朝のあるべき統治の理念をことあるごとに説く。武の原理で樹立した現王朝を文の原理で粉飾すること、現王朝の正統性の根拠を提示すること、これが君主の家産（つまり全帝国）を管理する行政幹部のもう一つの大きな任務である。

東晋（二六五―三一六年）の場合、まだ所謂科挙体制は成立しておらず、王朝の地方と中央の尨大な行政幹部は郷村社会の与論による推薦制、つまり九品官人法[2]によって供給された。この制度の主旨は、元来「人才を尽す」能力主義にあったが、曹魏の正始の初年（二四〇年）頃、「州大中正」の出現によって、郷党の与論を掌握する有力豪族の私的工具と化し、ここにいわゆる「上品に寒門なく、下品に勢族なし」、「上品に據る者、公侯の子孫にあらざれば、当塗（枢要の地位にいる者）の昆弟なり」という状況が出現する。

次に宮崎市定氏、越智重明氏の研究によって、勢族、寒門の社会的状況を示す[3]。

	郷品	起家の品官	任官年令	社会階層	別称
甲族	1～2	5～6	20～24	上級士人	世家、上品、右姓
次門	3～5	7～9	25～29	下級士人	寒士、寒門
後門	6～9	流外官	30～	最下層の官僚	七職層、職掌層

この表から甲族は「州大中正」によって郷品一、二品を与えられ、中央・地方の五、六品官に、年令二〇～二四歳で任官し、世家、上品、右姓などと呼ばれる上級士人であると読みとれる。次門、後門も同じように読みとる。さて、

このような事態、つまり郷品が中央政府の官僚体制に直結している状況、郷品が郷品として当該地方で独自の機能を持たず中央の政治体制に直接に組みこまれて初めて意味を持つとの状況こそ、東晋の「貴族制」になるものが、支配階級の上層を意味する広義の「貴族制」ではあっても、従士制と恩貸地制を基礎とし忠誠宣誓に基づく、西欧中世紀の如きの厳密な意味での「貴族制」ではないことを示している。つまり宮崎氏の発見は逆に東晋貴族制の帝権への従属性を証明するものではあるまいか。

甲族と次門との間には厳然たる格差があり、次門が高い位に上昇していくのはほとんど不可能であった。ただし次門・寒門とはいえ、また寒士とも呼ばれ士族であって、庶人との間には大きな身分差があった。支配階級である士族（特に上級士人）は、「律」、「律令」の厚い保護を受けており、「八議」による法的保護、占田などによる経済的特権を享受していた。[4]

「八議」とは、①議親（皇帝の宗室や親戚）、②議故（長期皇帝に待奉せる者）、③議賢（有徳者、士族地主のこと）、④議能（軍旅を整え、政事に臨み、人倫の師範であった者）、⑤議功（大勲功ある者）、⑥議貴（大官僚、貴族）、⑦議勤（勤労せる者）、⑧議賓（前朝の皇族と子孫）であって、基本的には君主および君主の家産管理に力を尽した者への法的保護を与えることを立法の主旨としている。家産官僚制国家の特色をよく表わしている法体系であって、特に「議親」と「議貴」が重視され、皇族、元勲およびそれらの子弟の重大犯罪が多く特赦あるいは黙認された。

以下『晋書』四九巻「羊聃（ようたん）伝」から有名な一例を示す。成帝（三二五―四二）の時、廬陵（江西省吉永県）の太守羊聃は、「国戚を恃み、縦恣最も甚だ」しく、同郡の簡良ら二百余名を賊といいたてて殺し、殺戮は嬰児子供にまで及び、そのほか「髡（髪を切る）」、「鎖（鎖でつなぐ）」された者百余人という事件がおきた。しかし羊聃は結局は特赦

され、結果的には八議が適用されたケースとしてよく引かれるようであるが、かなりこみ入った人間関係のからみあいの末特赦されたのであって、八議の無条件的適用ではなかったようである。

庾亮は羊聃を逮捕し、京にまで護送してきた。有司は上奏して死刑を主張したが、羊聃の祖父の姉妹（祖姑）が景献羊皇后（曹魏の景帝の妃で咸寧四年〔二七八〕六五歳で没）であったことから、八議の「議親」に該当した。しかし成帝は「こんなことは前代未聞である、八議にあてるとはとんでもない。市朝（いちば）で殺すのは可愛そうであるから獄中で殺せ」と命ずる。羊聃の兄、羊曼の子羊賁は明帝の娘（つまり成帝の妹）南郡悼公主を娶っていたが、族弟の非道を恥じて自ら離婚を言いだす。これには成帝もあわて、「弟の罪は兄には及ばぬ」と妹を思って離婚を許さない。

成帝の実弟に当る琅邪王岳（成帝の没後康帝として即位）の太妃山氏は羊聃の甥（姉妹子）に当り、成帝の育ての親でもある。山氏は宮中におもむき、血を吐いて羊聃の命を乞うた。司徒・録尚書事の王導も、山太妃が羊聃のことを心配の余り病気になってしまったことを言い、特に赦してほしいと願う。成帝は山太妃から育てられた恩もあり、「今、すなわち聃の生命を原（ゆる）す」と詔し、羊聃は死罪をまぬがれ、結果的には八議の「議親」が適用された形となった。しばらくして聃は病気になり十日もたたないうちに急死する。専ら簡良らの祟りだといわれたと史書にある。

次に経済的特典とは、『晋書』の「食貨志」によれば、官品に対応して次の如く占田、衣食客、佃客を保有した。

官品	1	2	3	4	5	6	7	8	9
占田（頃）	50	45	40	35	30	25	20	15	10
田客（戸）	50	50	10	7	5	3	2	1	1
衣食客（人）	3	3	3	3	3	3	2	2	1

これは西晋時代の規定であるが、東晋時代も継承されたと考えられる。「食貨志」に東晋時代の規定が書かれていないのは、東晋に至ってもこの規定に変化がなかったからであろう。田客や衣食客の労働や労働果実は、国庫をではなく、彼らが仕える士族たちの経済を直接に潤した。陶淵明を例にとれば、通説として、彭沢令として最低八品の官位にあったようである。すると、この規定に従えば、陶淵明はすくなくとも占田一五頃、田客一戸、衣食客二人を持つことができたことになる。後に見るように、詩の中で陶淵明が貧しさを強調するのはレトリックの問題、創作の虚構性の問題かも知れない。

とまれ、東晋の国家機構は、かくて上は三公、宰相、録尚書事から、下は六品の官位に至るまでいわゆる甲族が独占し、官職貴族制への傾斜を示す。先に引いた西晋の中葉における段灼の時勢批判、「上品に據る者は公侯の子孫にあらざれば、当塗の昆弟なり」はすぐ続けて、「二者苟然（互いに手を結ぶ）たれば、畢門蓬戸（貧者）の俊才たちは陸沈せざるを得ない（安得不有陸沈者哉）」という。「陸沈」とは「陸に沈む」、権力もて社会の表面に浮かび上るのではなくて、「民衆の中に埋れ、田園に隠れ、その名はひそかに、その志は涯がない…、世俗と違い、心で世俗と共にするのを拒否する（心不屑与之俱）、これを陸沈という（『荘子』則陽篇）」。勢族が高位高官を独占しているので、寒門中の俊才が野に隠れてしまうと段灼は批判したのである。

ところで、この「陸沈」の語の意味するものは、われわれの術語でいえば「政治的無関心」political apathy[5]にほかならない。政治的無関心とは、通常、政治権力とその象徴に対して積極的に忠誠も示さなければ積極的反抗も示さないという、いわば権力過程からの引退である（平凡社『政治学辞典』　丸山真男氏による「政治的無関心」の項）。アメリカの政治学者ロバート・ダールは『現代政治分析』（一九六三）の中で、アリストテレス以来の、人間は政治的（ポリス）動

物であるとの定義に疑問を呈し、人間は社会的動物 social animal ではあっても、必ずしも政治的動物 political animal ではないと述べ、その例として、紀元前五世紀、アテネ民主政の最盛期といわれるペリクレス時代においてすら市民の民会への出席が極端に悪かったこと、またアメリカ民主々義の原点ともいうべきニュー・イングランドのタウン・ミーティングにおいても、政治的無関心が蔓延していたことを挙げている。

一体このような事態は何故おこるのであろうか。何故政治的無関心層が発生するのか。ダールは「政治的有効性感覚」the sence of political efficacy の観点から、この感覚の欠如する者が「非政治層」apolitical stratum を生み出すと述べているが、われわれの文脈から言えば、ハロルド・ラスウェルの動機論からみる政治的無関心論の方がより注目に価する。それは「脱政治的態度 depolitical attitude」、「無政治的態度 apolitical attitude」、「反政治的態度 anti political attitude」と名付けられる「低レベルの政治化 a low degree of politicization」の三つのタイプであって、当該国家社会の政治あるいは権力過程に幻滅して、政治への関心が次第に減退していき、科学とか芸術という権力以外の価値に向かうものと解される（ダール、ラスウェルらについては後にさらに別の視角からも詳述されよう）。

西暦四、五世紀、東晋に見られた権力の腐敗、甲族の高位独占といった事態は、ラスウェルのいう政治への「幻滅」、「権力以外の価値の騰貴」という現象を知識人・行政幹部のある層に生み出すであろう。寒門人士の政治への幻滅、芸術や詩への積極的転換といった「脱・非」の政治的態度を生み出そう。われわれはこのような思想傾向をアルカディアーと名付け、その典型を陶淵明に見出そうとする。以下の論述では、まず陶淵明自身の思想の変化を辿づけること、ついで陶淵明の詩文を分析する方法論的観点から「桃花源記并詩」の成立期を確認し、「アルカディアー期」を設定することにしよう。

(二) 陶淵明のアルカディアー期

陶淵明六二歳の生涯は、通常主としてその生活形態の変化に着目して、次の三期に分けるようである。[6]

第一期　三六五～九二年、農耕と勉学期

第二期　三九三～四〇五年、小官吏期

第三期　四〇六～二七年、躬耕生活期

ところで陶淵明の全作品、詩一二五篇、文一一篇[7]はこの三期にどう属するのか。いま、王瑤氏の『陶淵明集』（北京人民出版社、一九九〇、初版一九五六）と、この王氏の業績に改良を加えた唐満先氏の『陶淵明集浅注』（江西人民出版社、一九八五）の製作年代推定に拠りつつ、陶淵明の全作品、但し「聯句」を除いた全一三五篇をこの三期に配してみよう。

この全一三五篇の詩文のうち、陶淵明自身によって製作年が記されているのは、たった一六篇（下文の表中で傍線を付した）にすぎず、他は全て、後に見るように何らかの方法によって年代が推定されている。推定の論拠が違えば繫年も異なり、学説紛岐して定論なき詩文もある。一例のみ示せば、下文の第一期に見える「五柳先生伝」は、王・唐氏によれば陶淵明の若き自画像として三九二年、淵明二八歳の時の作品とみるのに対し、別の学者逯欽立氏によれば、四二〇年、陶淵明五六歳の頃のものであろうというが如きがこれである。ともあれ、王・唐氏による繫年は次の通りである。長い作品名は略記し、通し番号を付した。

第一期　三六五―九二年（一―二八歳）

三九二年、①五柳先生伝。

第二期　三九三―四〇五年（二九―四一歳）

三九三年、②命子。

三九四年、③閑情賦。

四〇〇年、④⑤庚子歳五月。

四〇一年、⑥辛丑歳七月、⑦～⑩雑詩四首。

四〇二年、⑪⑫和郭主簿、⑬晋故征西大将軍。

四〇三年、⑭酬丁柴桑、⑮⑯癸卯歳始春、⑰勧農、⑱感士不遇、⑲癸卯歳十二月。

四〇四年、⑳停雲、㉑時運、㉒栄木、㉓始作鎮軍参軍、㉔連雨独飲。

四〇五年、㉕乙巳歳三月、㉖帰去来兮辞。

第三期　四〇六―二七年（四二―六三歳）

四〇六年、㉗～㉛帰園田居五首、㉜帰鳥。

四〇七年、㉝祭程氏。

四〇八年、㉞責子、㉟戊申歳六月。

四〇九年、㊱己酉歳九月。
四一〇年、㊲庚戌歳九月。
四一一年、㊳㊴移居、㊵祭従弟。
四一二年、㊶与殷晋安別。
四一三年、㊷五月旦作、㊸～㊺形影神、㊻止酒。
四一四年、㊼和劉柴桑、㊽酬劉柴桑、㊾～㊿雑詩八首。
四一六年、(57)丙辰歳八月、(58)示周続之。
四一七年、(59)贈羊長史、(60)～(79)飲酒二十首、(80)還旧居、(81)悲従弟。
四一八年、(82)諸人共游、(83)和胡西曹、(84)怨詩楚調、(85)歳暮和。
四一九年、(86)九日閑居。
四二〇年、(87)～(93)詠貧士七首、(94)読史述、(95)扇上画賛。
四二一年、(96)遊斜川、(97)～(105)擬古九首、(106)桃花源記并詩、(107)述酒、(108)於王撫軍座、(109)与子儼等。
四二二年、(110)～(122)読山海経十三首、(123)蜡日。
四二三年、(124)答龐参軍、(125)答龐参軍、(126)詠二疏、(127)詠三良、(128)詠荊軻。
四二五年、(129)贈長沙公。
四二六年、(130)有会而作、(131)乞食。
四二七年、(132)～(134)挽歌、(135)自祭文。

これによると陶淵明の詩文は第一期に一篇、第二期に二五篇、第三期に一〇九篇と、第三期二一年間に集中し、ここにわれわれの注目したい「桃花源記并詩」が含まれている。そこでいま、この第三期二一年間一〇九篇を年を追って通読していき、そこにいかなる詩境が見られるか、繁をいとわず、詩の主題、鍵となる概念、注目すべき詩句などをとり出してみよう。

四〇六年、園田賛歌、躬耕、幻化。

四〇八年、自宅の火災、躬耕、父としての情。

四〇九年、人生の労苦あり死あり、酒にて楽しめ。

四一〇年、「田家の苦」あるも、酒と「沮溺（隠者）の心」あり。

四一一年、「素心」の人々との交遊と力耕賛美。

四一二年、「清話」の隣人への別れ。

四一三年、死すべきものとしての人間、心の欲するままに生きよ。

四一四年、気力の衰損、前途なし、田園の居に満足、今を楽しめ。「栖々たり世中の事、歳月と共に相疏なり㊼」。

四一五年、農事の苦と収穫の喜び、世俗と妥協した周続之らへの皮肉。

四一七年、隠棲へのあこがれ。人生は短く（「夢幻の間㊼」）、宇宙は悠久、今を充実して生きよ。「悠然として南山を見る㊹」。

四一八年、花の盛りそして衰え、歓をなせ、辛酸の生活の回憶、安帝幽閉への悲憤と生の衰え。「市朝は旧人を悽ま

しめ㊺」。

四一九年、時運の傾きの認識、酒と菊と詩作の中に「棲遅（安らかに暮すこと）」ありという（「棲遅」は「オーティウム otium」つまり「心の安らぎ」とみる）。「空しく時運の傾きを視るや㊻」。

四二〇年、自己の寒飢・孤独、および隠士、貧士、義士への賛歌。「天人　命を革め、景を絶ちて窮居す㊹」。

四二一年、この年に作られたとされる詩文全一四篇中「窮達」を求めず仲よく暮らせとの子供たちへの教訓詩と王弘帰任への惜別の歌二篇をのぞいて、他の一二篇はすべて晋宋革命への文学的批判と考えられる（後述）。

四二二年、「山海経」の不思議な世界にひたる。「安らぎ」に満ちた祭りの日。

四二三年、友情、隠棲、死節の賛美。

四二五年、陶一族の栄光。

四二六年、乞食、「固窮の節」といった貧窮の生活。

四二七年、「自祭文」。

さてこの第三期全一〇九篇に常に現われる主題、中心思想は、田園生活・躬耕の苦楽、隠棲への賛美、そしてその底にたとえば「幻化㉚」、「人理もとより終りあり㊷」などに窺われる一種の無常感の如き哀感、そして言うまでもなく今という時を充たす酒である。ここでは「栖々たる世中の事、歳月と共に相疏なり㊼」、「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る㊹」などと言ってのんびり構えていることもできた。ところが、四一八年を境として全く新しいテーマが出現するのに気づく。外界のカオス、「栖々たる世中の事」が陶淵明のコスモスを脅かし始める。「時運の傾き㊻」

が陶淵明の意識にのぼらざるを得なくなる。自己を中心とする小宇宙の世界に代って、外界の巨大な政治的圧力が極めて難解な語句に秘められて歌われはじめる。それは劉裕の抬頭、簒位の意思にかかわる。

劉裕は四一〇年二月、山東地方に拠る鮮卑族の南燕（慕容超）を平定し、四一三年七月には、一転して、成都王を称し後秦と通ずる譙縦を平定（朱齢石の軍を派遣）する。ついで、洛陽・長安を支配下におく真の敵後秦を平定すべく、四一六年八月首都建康を出発し、先発隊王鎮悪の奮戦で洛陽を陥し、四一七年四月には洛陽に入城、同年八月には長安をも陥す（この戦闘の状況は吉川忠夫氏『劉裕』中公文庫に詳しい）。

北伐して旧都洛陽のみならず後秦の首都長安をも奪回するという東晋初の空前の大功が劉裕によってなしとげられた。北魏の博士祭酒の崔浩は、早くも四一七年五月、洛陽陥落直後に、「劉裕は秦に克って帰り、必ず帝位を簒うだろう（必簒其主）」と見ぬいていた。劉裕簒位の意図は、東晋に対峙する北魏や夏の指導者たちにはもちろん、東晋の具眼の士にも最早歴然たるものがあった。

果して崔浩の予測そのままに、劉裕は長安に留守部隊を残して兵を返し、四一八年一月本拠彭城に戻る。四一八年六月、劉裕は相国、宋公、九錫の命を受け、十郡を支配する宋国が誕生する（これら一連の優遇措置は劉裕自身のさしがねであること言うまでもない）。孔靖を宋国尚書令に、左長史の王弘を僕射に、傅亮と蔡廓が侍中になり、その他の官制もことごとく中央の東晋王朝と同じである。かくてここに、東晋国家の中に、一つの国家内国家が出現する。

劉裕の簒位を知る琅邪王徳文は、常に兄・安帝の左右に侍り、飲食寝所も共にして警戒をおこたらない。しかし徳文がたまたま病気になって不在の間、かねてより劉裕の命を受けて隙を伺っていた中書侍郎の王韶之が、四一八年一二月一七日、宮中の東堂にてこの智恵遅れの安帝を散衣にて縊殺す。安帝時に三七歳。劉裕は安帝の遺詔と称して、

その日のうちに弟の徳文（三四歳）を恭帝として即位させる。当時東晋国内では「昌明の後になお二帝あり」なる予言がささやかれていた。つまり、昌明（孝武帝の字、三九六年九月没）の後になお二帝ありて晋祚は尽きようとの予言である。これは劉裕（側）が作為的に流したものと推測されるが、この予言が人為的に充足されていく。劉裕はこの予言に従って孝武帝（昌明）をついで即位した長子の安帝を殺害したのである。この予言に従えば安帝をついで皇帝となった安帝の実弟、琅邪王司馬徳文（恭帝）の退位あるいは死によって東晋は亡びることになる。劉裕は予言を充足させるべく、やがて恭帝をも殺害することになろう。

四一八年の暮れ一二月、陶淵明は親戚張野の死とこの安帝弑害の報を知り、張野の一族の張詮の詩に和す。「歳暮張常侍に和す㊺」の冒頭の二句、「市朝は旧人を悽ましめ、驟驥は悲泉を感ぜしむ（宮廷や町の盛り場の激変は、往時を知る者を悲しませ、早き時の流れは、落日の悲哀を感じさせる）」は、古くから安帝の殺害に結びつけた感懐と解され、この年（四一八年一二月）に繫年されてきた。とするなら淵明のこの詩の主題は、落日の東晋におのれの人生の落日を重ね合わせての慨嘆であり、第四句以降自己の老いへの嘆きは、また東晋の末期への嘆きにほかならず、「夕べに向いて長風起り、寒雲　西山に没す」とは、まさしく両者の命運を暗示する心像風景となる。陶淵明はこれまでの詩作には見られなかった外界の「栖々たる世中の事」を、ここに初めて詩のテーマに取り入れる。自己の心境身辺を中心に歌ってきたこれまでの詩作態度とは全く違って、王朝の衰運という政治の世界が初めて詠まれたのである。

四一九年七月、劉裕は宋王に進む。劉裕の国家内国家は今や王位を頂き、これまでの十郡に、新しい更なる十郡の封地を加え、長江下流から黄河に至る広大な領地を支配する。時に劉裕五六歳（淵明五四歳）、今や陶淵明の嘆く人生の落日が彼にも迫る。畢生の「大業」の完成つまり東晋の打倒を急がねばならぬ。他方、陶淵明にあっては全く逆の

立場であって、「九日閑居⑧⑥」中の次の一句、「如何ぞ蓬廬の士、空しく時運の傾くを視るや」は、如上の従来の詩境、精神、つまり自己の老いと東晋の衰運を嘆く傍観者的態度への強い自己反省の句と見なければならない。「九日閑居」はまさに四一九年九月の作品であり、今や東晋が落日の如くに西山に没しようとしているのに、これを空しくみつめていてよいのか？否、断じてそうではないとするなら、詩人として一体いかなる方途が可能なのか？この政治的混乱の時代に生きる詩人として一体何をなすべきか。これこそ陶淵明の深刻な自己反省であり、いわば詩人としての自覚の自己表明にほかならない。この深刻な自己省察が、やがて「桃花源」なる理想郷を発見することになる。

四二〇年六月九日、劉裕は建康に入り、簒奪の最後の仕上げにとりかかる。昌明（孝武帝）の後に二帝ありとの予言によれば、すでに安帝を殺害しているから、この恭帝を廃さねば予言は充足されない。この日、傅亮は劉裕とはかって恭帝に禅位を催促する。すると恭帝は「欣然」として筆をとって退位の詔を書き、左右の者にこう言ったという。「桓玄のとき晋室はすでに天下を失っていたのだ。それを劉公のおかげで二〇年も延ばしてもらった。今日の事態はもともと覚悟の上である」と。六月一一日、恭帝は琅邪王の邸第にひきあげ、六月一四日劉裕が即位する。東晋の滅亡、宋の誕生である。この日恭帝は零陵王におとされ、秣陵県に宮することになる（恭帝は翌四二一年九月劉裕の命令で扼殺され、淵明は「述酒⑩⑦」を作ってこれをいたむことになる）。

陶淵明が伯夷・叔斉に託して「天人　命を革め、景を断ちて窮居す⑨④」と詠んで「革命」「窮居」に無限の感慨を催し、箕子に託して「いわんやこれ代謝（殷周の革命のこと）して、触るる物みな非なるをや⑨④」と亡国の悲しみを歌い、他方、程杵に託して「生を遺つるは良に難し、士は知己の為にす⑨④」と激しい憤りを示し、丈人、長沮、桀溺といった「時ありて隠る」「達人⑨⑤」に託して「高く人間を謝す」隠逸をたたえたのは、まさにこの四二〇年六月の「代

謝」に際しての痛憤の感懐と見るべきである。眼前の政治過程への憤り、幻滅、そして隠逸賛美という心理過程は、まさしく晋宋「代謝」への感懐の吐露に他ならない。つまり「代謝」への憤り、そして隠逸礼賛という心理過程は「政治過程への幻滅」と説明でき、ラスウェルのいう「脱政治的（デ・ポリティカル）」態度にあたる。

しかし、にもかかわらず、陶淵明は自覚せる詩人として、さらに「無政治的（ア・ポリティカル）」態度、芸術、詩文の価値高騰というもう一つ心理過程を持っていた。この「無政治的」態度は、現在の堕落せる政治、権力にいかなる期待も抱けず、それがために自己の拠り所とする詩人としての自覚[9]もて、詩文を介してこの悪しき政治、この悪しき時代の証言者（告発者）となること、そしてその方法は現実の対極としての理想社会を詩的に示すことである。陶淵明にあっては、政治への憤り、幻滅から、眼前の政治過程への全面的批判への移行は、四一八年の落日の東晋への嘆き、四一九年の時運の傾きを傍観できぬとの認識を経て、四二〇年劉裕の簒奪、東晋の滅亡に憤って後に到来した。嘆き、不安から諦観へとゆれ動いた末に、傍観者的態度への反省と劉宋への憤激が、陶淵明にもう一歩の前進をもたらす。そしてそこに現われて来た世界こそが桃花源の世界であったと考えられる。現実の悪しき政治への詩的・文学的批判として、ここに一つのあるべき対抗像、桃花源の理想郷が提示されたのである。桃花源の発見は、こうして、簒奪（革命）という客観的政治状況の極限化と、傍観者たることを峻拒しようとする主体的条件の高揚の末に初めて可能となった。従って後にも見るように、「桃花源記并詩」を劉裕の簒奪以前に繋年する学説にはどうしても納得できぬものがある。

桃花源の構想は、四一八年羊松齢から漢中の堡塢の話を聞き知り、それに加うるに当時よく知られていた鹿を追って隠れ里を見出す溪蛮の猟師の話、劉驎之が薬草を山に採りに行き、途に迷う話などを結びつけ、ここに、この悪しき政治過程そのもの（東晋の為政者の無能と劉裕の非道な簒奪との複合過程でもある）に対置される理想の桃花源が

姿を現わす。王瑤・唐満先氏がこの「桃花源記并詩」を劉宋成立後（四二一年頃）に成立したものとしているのは妥当な見解と思われる。われわれが上文で述べてきた陶淵明の思想の流れ、執筆の動機もそのことを肯定していると考えられるが、これについては後でもう一度別の角度から考えてみることにしよう。ともあれ、「桃花源記并詩」は、単なる「現実の生活を描写した田園詩」ではなく、廖仲安氏が『陶淵明伝』（一九八七）で説くように「現実の制度に反抗する田園の理想国」[11]に他ならない。現実の、望ましからぬ、悪しき政治に対置された陶淵明の理想社会としての「アルカディアー」なのである。廖仲安氏が、陶淵明の詩は単なる田園詩から文学的・詩的抵抗の「桃花源」へと発展をとげていると指摘したのは見事な分析と思われる。とするなら、陶淵明の詩は、その生活形態に従って通説の如く三期に分けるのではなく、通説にいう第三期を二分して四一七年と四一八年の間に大きく一線を画し、四一八年以降を現実政治への文学的・詩的な批判が見られる「アルカディアー期」とすべきではあるまいか。もちろんこの「アルカディアー期」の中心的作品に「桃花源記并詩」があることは言うまでもない。かく陶淵明の思想的展開に着目して、四一八年以降を陶淵明の第四期「アルカディアー期」と名付ける。陶淵明の生涯をその思想的変化に着目して次の四期とする。

第一期	三六五―三九二	思想形成期
第二期	三九三―四〇五	隠棲願望期
第三期	四〇六―四一七	田園詩人期
第四期	四一八―四二七	アルカディアー期

第四期の中心的作品に「桃花源記并詩」があることから、この期を、たとえば、「武陵桃源期」などと名付けることも可能ではあるが、われわれは「アルカディアー期」とする。これは普遍的な思想的範疇としての「アルカディアー」なのであって、ウェルギリウスの「牧歌」を原型とし、時代や国境を超えた普遍的な、思想の存在形式を示す概念である。陶淵明の詩的思想に世界史的な広がりを見出そうとするわれわれは、従って、この期をもっと幅広い「アルカディアー期」と名付けるのである。[11]

われわれは、以上、「桃花源記并詩」の成立期を王瑤・唐満先氏の学説に従って四二一年（頃）としてきた。以下ではそのように推定する論拠・方法についての今日の諸学説を検討しておこう。「桃花源記并詩」の製作年代推定の方法[12]は、およそ次の二つに大別できよう。

一つは、主として、特定の政治的事件、具体的には劉裕の簒位劇に直接に関連づける方法。これは宋代以降多くの学者がとってきた最も伝統的正統的な方法である。楊勇、逯欽立氏の所説をとりあげる。

楊勇氏は『陶淵明集校箋』（台北正文書局　一九七一）で次のような論拠をあげている。

①明代の黄文煥の『陶詩析義』の「これは宋を憤る説なり」との説。

②清朝末の翁同龢の「義熙一四年（四一八）劉裕は安帝を弑し、年をこえて東晋ついに亡ぶ。史に義熙末（一四年まで）著作左郎に徴せられるも就かずと称す。桃源避秦の志はこの時にあるか」との見解。

③劉熙之（これは「桃花源記」中の劉子驥のことという）が衡山に薬草を採りに行き道に迷った話。

④「桃花源記」に「漢あるを知らず、魏晋は論うまでもなし」とあるは、「明らかに易代の際の憤りの語である」との判断。

⑤「近人陳寅恪の『桃花源記旁証』〔一九三九〕は説く所ますます緻密ではあるが信ずるに足らぬ」。

といった論拠からその成立を義熙一三年（四一七）としている。この説は①④の論拠からすれば劉裕簒位のあとに繋年するのが妥当と思われるが、②の論拠を重視して四一七年としたのであろうか。

熙欽立氏の『陶淵明集』（香港中華書局一九七九）は、清代以前の学者の製作時期推定の根拠が主として「避秦を避宋に見たてる」にあったとして、明の黄文煥の説（楊勇氏の①）、清の余良棟の『桃源県志』の「偽宋に仕えないとの説は深く靖節〔淵明〕の本旨を得」との説、清の翁同龢の説（楊勇氏の②）を紹介し、基本的に賛意を表し四一八年に繋年している（但し逯氏はこの方法を全面的に肯定している訳ではない—後述）。

楊勇氏あるいは逯欽立氏の示した過去の学者たちの方法は、「桃花源記并詩」の成立が劉裕の簒奪への意志に憤ったものとする一定の解釈的・思想的前提がまずあり、その反劉裕の証拠を作品から読みとるという方法である。たしかに製作時期が明記されていない場合、特定の事象に結びつけて理解するしかないようではあるが、もうすこし客観的あるいは外在的証拠がないものであろうか。

もう一つの方法はそういった反省の上に立って成立年代を考えようとするもので、当時の社会状況をも考慮に入れて考察しようとする。方法論的には、楊勇氏の否とした陳寅恪氏の「桃花源記旁証」（一九三六）に主として依拠するものである。以下数名をとりあげてこの論証の仕方を一瞥しておく。

王瑤氏の『陶淵明集』（一九五六）は次の諸点を論拠とする

①陳寅恪氏が「桃花源記旁証」で説くように、淵明の桃花源の素材は征西の將佐が帰国して話した西北人民の苻秦〔苻氏の前秦のこと〕の暴政から逃れるありさま。

②『三国志』田畴伝の、徐無山中での躬耕生活に見られる堡塢生活が桃花源記中の記述と類似していること。

③ところで「擬古」第二首（98）に田畴への追慕が見られ、かつその第九首は「国を悼み、時を傷み、節義を追慕」するものであるから「擬古」は四二一年の作であろう。

④従って以上から「桃花源記并詩」は「擬古」と同じ四二一年に書かれた。

逯欽立氏は、すでに言及したように、伝統的な解釈法を容れつつもなお、「桃花源記并詩」が生み出された社会的背景をも問題にした。東晋の末年、江州、荆州における封建的搾取は残酷を極め、江・荆の人民は苛政に耐えきれず、徭役のない五溪の蛮族の地に大量に逃亡した事実をあげ（前掲書二五六頁）、これが桃花源を構想するに至った社会的背景の一つとした。

李長之氏『陶淵明伝論』（一九五三）は、

①羊松齢や戴延之などから聞いた関中での桃花源に似た苛政からの避難の話。

②劉驎之が衡山に薬草を採りに行き道に迷った話。

③「桃花源詩」の中で四皓にふれ、「贈羊長史」（四一七年）の中でも四皓を追慕している。

以上のことから、その「創作年代はおそらくこの一、二年のこと」、つまり四一八年頃のこととした。

唐満先『陶淵明集浅注』（一九八五）は王瑤氏の所説に基本的に依拠しつつ、

①『三国志』田畴伝の徐無山中での堡塢生活の如き事例はすでに陶淵明当時よく知られていたこと。

②「擬古」の詩が劉宋の初年（四二一年）であること。

③「桃花源記」の冒頭、「晋の太元中…」という言い方は「晋が滅亡した後のこと」であるから、これは四二一年の

創作である。

王瑶・唐満先氏が東晋滅亡後にその成立をみるのに対し、楊勇、逯欽立、李長之の各氏は、推定の方法は異なるけれども、その成立を劉宋建国以前の四一七年あるいは四一八年に求める点では一致する。楊・逯氏の説についていえば、劉裕の簒奪を予見して書かれたことになり、とするならばそれは警世の詩となるはずであるが、果して陶淵明にそのような政治的意図があったであろうか、疑問である。そもそも「宋を憤る」反劉裕の思想で検出する方法は、予想される仮想の事態に対してではなく、ある極めて具体的な、起ってしまった事件に対する陶淵明の感懐を作品から読みとるという方法ではなかったか？　デ・グレージアを援用すれば、君主の死あるいは中国の場合なら王朝の滅亡が最も衝撃的事件であろうが、そのとき、同時代に生きる人々は、衝撃→不安→諦観という心理過程（いわゆる acute anomy）を経ることを示した。この理論は現実に生起した大事件によってこれまでの信念体系が大いに動揺させられることを明らかにしているのであって、予想される、未来の出来事に対してではないことに留意すべきである。従って「桃花源記并詩」はまさに東晋の滅亡・劉裕の簒奪以後に成立したとみるべきではあるまいか。楊・逯氏の繫年、なお疑問ある所以である。

李長之氏は、すでに見たように、この作品を四一八年（頃）に繫年する。いまその論拠を推察するに、羊松齢は、通説によれば、義熙一三年（四一七）八月の後秦姚泓の投降、長安奪回の報をきき、劉裕に祝賀を述べるべく長安に向かう。羊は祝賀を述べたあと、凱旋将軍に先だってさっさと帰国できるはずもなく、劉裕軍と行動を共にしたと考えられる。劉裕の軍が「東還」して彭城に至り、そこで軍旅を解くのが四一八年一月二六日のこと、この日まず琅邪王徳文（安帝の弟、安帝弑害ののち劉裕によって恭帝として即位させられる）が建康に戻っているから、他の高官が

休暇をとれたのはそれより遅れるであろう。そして羊松齢の上官朱齢石は四一八年一〇月には陥落寸前の長安に劉裕の次子義真の救出という大任もて派遣されているから、長史である羊松齢も休暇を終えて帰任したとすると、陶淵明が羊松齢のみやげ嘶を聞けたのは、すくなくとも四一八年の三月頃から九月頃の間のことになろう。そして同年一二月一七日に安帝殺害がおきている。とするなら、李長之氏の説は、半年ほど前に聞いた関中の堡塢の話などを参考にしつつ、安帝殺害後の一、二週間ほどの間に、一気に、この年のうちに、「桃花源記并詩」が完成されたと見ることになる。確かに、この作品が一、二週で完成しえないとはいえない。また確かに白痴の安帝殺害が大きな事件ではないとは言えない。しかし、にもかかわらず、東晋の王朝は安帝の弟恭帝がその日のうちに立てられ、劉裕の意図が奈辺にあろうとも、ともかく王朝は存続しているのである。しかも、この点が特に留意されなければならないが、陶淵明は、上文に見たように、この四一八年の暮、「市朝は人を悽(いた)ましめ、驟驥は悲泉を感ぜしむ㊺」と詠み、落日の東晋に無限の慨嘆を吐露していたのである。おのれの人生の落日と東晋の落日を重ね合わせたこの年の暮れつ方の寂寞たる心境は、精神的抵抗を示す「桃花源記并詩」の詩境とは大いなる懸隔がある。かくてわれわれは、李長之氏の四一八年に繫年する説は、楊勇・逯欽立氏の説と同じく、篡位以前にその創作年代を置くという点で疑問である。

以上、方法論に関する考察から「桃花源記并詩」の成立年代を推定してきたが、結論として王瑶・唐満先氏の方法・考察が優れていることを確認し、かつ、「桃花源記并詩」は、晋の衰えを坐視しえぬとの反省の上に立って、劉宋の成立以後（四二一年頃）に成立したことを押えておきたい。しかも、四二〇年から四二三年に繫年された四二篇の詩文中、酒友にして良友への惜別詩（㉘㉔㉕）と子供への教訓詩（㉙）の四篇をのぞいて、他の三八篇はすべて

①理想的な社会あるいは安らぎの精神に満ちた心的世界。これは「桃花源」の世界と同質なものであり、この中に

（ここでは各詩の説明は省くが）、遊斜川、詠貧士、読山海経の一から十まで、蜡日も含める。

②劉宋への憤り。文学的・詩的な抵抗の典型例であって、歴史的人物、歴史的事件に材をとり今を批判する。読史述、扇上画賛、擬古、述酒、読山海経の一一から一三、詠二疏、詠三良、詠荆軻。

のいずれかに属す。これはつまり陶淵明の思想が一方現実の政治を憤りつつ、他方混乱の現実政治に対置される理想世界をもっていたことを示す。一方では現実政治に幻滅し（脱政治的態度）、他方では政治以外の価値の高騰（無政治的態度）が見られることから、従来これは逃避の文学とみなされることが多かったが、恐らくこれは文学の本質を見誤った見解ではあるまいか。われわれは提示された理想社会（桃花源の如き）の背後に、優れた詩人であるならば、時代との鋭い対立・葛藤・対話を通じて自己の詩的世界を作りあげ、時代の証言者たらんとする文学の自立の思想、政治的には精神的抵抗の世界を見るべきなのである。陶淵明の詩的世界とりわけ第四期のアルカディアー期は、上記両者（①と②）の動的・弁証法的結合の時期として特異なのである。

㈢　陶淵明像の変化

陶淵明詩の解釈の流れは、大矢根文次郎氏の『陶淵明研究』（一九六七）や岡村繁氏の『陶淵明』（一九八四）などによれば、「桃花源記并詩」の世界を仙境とみる神仙境説から、「述酒」や「詠荆軻」に見られる忠節の淵明像へと変化したという。[13] われわれはこの通説をふまえ、忠節の淵明像を一歩進めたところにアルカディアー・武陵桃源が出現してくると考えるものである。陶淵明解釈史をたどることによって、隠されていた陶淵明の真の姿が浮かび上ってく

る様子を描くことが以下の論述のねらいである。以下ではまず、武陵桃源の出現から説きおこし、ついで神仙境説、最後に忠節像を検討していくことにしよう。

武陵桃源を詠みかつ論じた詩文を網羅して郷土を顕彰しようとした武陵の人唐開韶の『桃花源志略』（一八四六）には、南朝四人、唐四一人、宋二三人、金四人、元二一人、明一六一人、清二七一人、全五二六人の詩文七九三篇をのせているが、その最初期、南朝の四人とは、晋の武陵人なるよみ人知らず、梁の劉孝勝、周の庾信、陳の徐陵である（以下『志略』による）。

六朝初期、武陵桃源はその明眉なる風光でのみ知られていたようである。さて武陵に淥蘿山なる山がある。美しい瀧がかかり、透明度の高い明月池がある。白い岩肌と翠の松、松風は琴の調をかなでる。晋代、武陵の人、よみ人知らずはこの風景を次のように歌う。

この山を仰ぎて迢々（高い）たり
層なす石　構なりて嵯峨（高い）たり
朝日　陽嵓（南の岩）に麗しく
落景　陰阿（北の丘）に梁なり
障壑（ふさがれた谷）音を生じ
唫籟（歌う笛）相い和す
敷芳（広がる草）たり緑林

恬澹（静か）たり潤波
この潭を楽しみて安流し
爾の櫂を緩めて詠歌せよ

梁の劉孝勝は「武陵深行」という五言排律（全二〇句）を作り、「武陵の深測られず、水安らかに舟また軽し」と歌い出してその自然美をたたえるが、桃花源は出てこない。北周の庾信に至って、五言律詩「擬詠懐」二七首中の一つに「桃花源」が、五言律詩「詠画屏風」中の一首に「桃源」が初出する。「詠画屏風」では、「逍遙として桂園に遊び、寂絶として桃源に到る」と歌い出し、前の二聯で桂林のたたずまいを、後の二聯で管声、人衣に満ちる歓楽の苑を歌うもので、陶淵明の田園の桃花源のたたずまいとは一致しない。ところが陳の徐陵の五言排律（全一四句）「山齋」は、はっきりと「桃花源記并詩」をふまえ、「復た風雲の處るあり、蕭条として俗人なし」「香を焼き道書を披く」と詠み、隔絶した山奥に、ひっそりと清らかにたたずむ仙境を描き、次の時代唐代の仙境説の先駆をなす。

唐代に入ると多くの詩人が陶淵明に注目し、多くの追随者を出す。王維（七〇一～六一）一九歳の時の作とされている「桃源行」は、桃源の地を「仙となりて遂に還らず」と仙境に見たてた。孟浩然（六八九―七四〇）の「宿武陽即時二首」（武陽は武陵のこと）でも、「仙家」、「仙子宅」などの語があり、王維と同じく仙境＝武陵桃源とみる。劉禹錫（七七二―八四二）は十年間朗州（唐代武陵桃源は朗州に属していた）に流された人であるが、その「桃源行」では「俗人の毛骨（容姿）仙子を驚かす」とか、「仙家一たび去って尋ぬるに蹤なし」と歌い仙境説に与した。

ところで唐代の桃源仙境説の中でも、王昌齢（六九八―七五五頃）の「武陵開元観黄練師院」なる七絶三首は留意

すべきで、その中の一首にいう。

松間　白髪の黄尊師
童子焼香　禹歩の時

桃源を訪ねんと欲して渓路に入り
忽として鶏犬を聞き人をして疑わしむ

この詩は、次に述べるように、桃花源と道士と童子との関係を伝える瞿柏庭伝説をふまえていると思われる。瞿柏庭伝説は、従来の桃花源研究では論及されることのなかったように思われるが、桃源仙境説を強化したとみられる。ならば瞿柏庭伝説とは何か（以下も『志略』）。

貞元元年（七八四）八月の日付をもつ符載（字厚之）の「黄仙師瞿童記」に大略次のような話をのせる。朗州の桃源の桃花観に黄洞源なる道士あり。そこに瞿柏庭なる一四歳の童子が弟子入りする。寡黙にして恭しく、修業も熱心に、二、三年たつ。瞿童はあるとき一人で谿に行き、深く洞中に入り、三日目に戻る。仙師に行った先を尋ねられ、「たまたま佳き地に造り、神聖に遭遇し、雲気を覩る。草木、屋宇、飲食、人をして澹然（くつろぐ）たらしめ、情として楽しまざる忘し。故に處る」と答える。そこで仙師たちと共に再びその霊仙の府に行こうとするが、何分子供のこと〔尚幼少〕、結局道がわからなくなってしまった（「桃花源記」との類似性に注目したい）。符載のこの記は、瞿童の不可思議な行動（日や月に至り、鶉首と合じたの如き）をいくつか伝え、最後に、この瞿柏庭は桃花観の庭にある大きな栗の木の傍らで、「人に遠ること数仞（一ひろ）にすぎず、遂に背行し冉々（進むさま）として樹の旁より滅没化去」してしまうさまを伝える。

この瞿柏庭伝説は長慶二年（八二一）五月の日付をもつ朗州刺史温造字簡輿の「瞿柏庭碑記」にやや整理された形で再出する。その大略。大歴四年(七六九)、賈子華なる者千人の手勢をひきいて武陵の五渓を劫す。五渓の人々は難を逃れて四散した。時に瞿柏庭一四歳、母と共にのがれ、武陵なる桃花観の道士黄洞源に弟子入りして修業にはげむ。この「碑記」は、畑で秦人の碁子を発見したなど、瞿柏庭のいくつかの不思議な行為を伝えつつ、あるとき柏庭は「仙洞に帰る」と師の洞源に言い、しばらくして「忽然と見えなくなって」しまう。瞿柏庭の兄は弟が登仙したと聞き、黄洞源に師事した。温造は朗州刺史となって武陵に赴任し、この柏庭の不思議な話をきき、その真偽を確かめるべく柏庭の同学なる人物にも会い、瞿柏庭伝説が真なることを確信してこの碑記を書いたと述べている。

会昌元年（八四〇）一二月の日付をもつ狄中立の「桃花観山界記」も桃花観と瞿童上昇と秦人洞との関係を記し、次にみる李徳（字文饒）の五律（序と割注をもつ）はこれを詩に詠んだものである。その序と詩を示す。

尊師は桃源の黄洞源先生なり。伝法の弟子常に尊師に見て先生と称す。霊跡いま重ねてこの詩を賦し、兼ねて黄先生の旧館に寄題す。

後学　方に市を成し
吾師　また上賓（今の茅山観道士は先生の弟子なり）
洞天　応に夜ならず
桃樹　秖春の如し（これ并びに桃源の事を述ぶ）
棋客　童子を留め（瞿仙童は即ち先生の弟子、桃源に仙人の棋子を得。伝記に載在す。）
山精　神に直るを避け（先生初め茅山に至る。童子法に触れ坐するに声あり。先生山神のなす所と疑い符を書き

てこれを召至たらしむ。その霊異かくの如し。）

因りて石髓を握るなく
養生の人に分かち与う

この詩は桃花源に瞿童伝説が結びつけられた一つの典型であろう。このように唐代では確かに仙境説が有力ではあったが、例えば有名な、張旭の七言絶句「桃花渓」「桃花　尽日流水に随い、洞は清渓の何處の辺に在らん」のように叙景に終始している詩も多く、また韓愈（七六八―八二四）のようにシニカルに「神仙の有無何ぞ眇芒、桃源の説まことに荒唐」と言い切ったりで、極めて多様であることを指摘するにとどめる。

以上のような仙境説に対して、岡村繁氏のいう「もう一つの淵明観、晋朝への節義に生きる〝忠臣〟としての厳しい淵明」も一瞥しておこう。桃花源そのものからは離れてしまうけれども、陶淵明の生き方、特に晩年の思想、詩境を知る上で欠かすことのできないものと考えるからである。

陶淵明は四二七年六三歳で没した。淵明と生前から交際のあった顔延之は「陶徴士誄」（『文選』巻五七所収）を書く。徴士とは学問徳行があり詔によって召されても仕えない者をいう。陶淵明は四一八年頃「著作（佐）郎」に召されたが出仕しなかったことを指す。誄とは死者の生前の功徳をたたえる文である。ここで顔延之は「幽居者」にして「素心」、高潔な人格者にして己の節操を貫き通した哲人との淵明像を描く。詩人ではなくて隠遁者としての生き方に評価の重点があった。

ついで陶淵明の没後丁度六〇年目、斉の永明五年（四八七）、沈約の『宋書』が書かれる。その隠逸伝で沈約は顔延之の描いた隠遁者にして純真なる淵明像の上に、忠節の詩人像をかぶせた。つまり、「帰去来兮辞」の全文を載せて隠

逸の田園詩人のイメージを定着させると同時に、淵明の晋朝への忠誠を表明したものとして、以後大いなる論議を呼びおこすことになる一文を書きつけた。次にその原文と訳文を示そう（括弧内は三石の注）。

潛は若い時官位が低く、進退に問題があった（より高い地位を求めて桓玄や桓玄に対立する劉裕に仕えるなどなりふりかまわぬ猟官をしたことを指す）のは、曽祖（陶侃）が晋の宰相（大司馬）であったことから、若い（成り上り）者たちに頭ををさげるのを恥と思ったからである。高祖（劉裕）の王業が次第に隆んになって（王業は隠喩で実際は簒位のこと、四〇五年以後の抬頭をいう）からは、二度と出仕せず、著わした文章には皆その年月を題したが（「皆」ではなくてたった一六篇にすぎぬこと本論文の(二)の章を参照せよ）、義熙（四〇五年）以前は晋氏の年号を書き、永初（四二〇年）以後は甲子だけを書いた（潛弱年薄官、不潔去就之迹、自以曽祖晋世宰輔、恥復屈身後代。自高祖王業漸隆、不復肯仕、所著文章、皆題其年月、義熙以前、則書晋氏年号、自永初以来、唯云甲子而已）。

もし淵明が二度と劉裕に仕えず、自分の作品に永初の如き劉宋の年号をつけず、しかも後になって断定されるように、劉宋になって名を陶潛と改めたなどということが事実であるなら、「二姓に事えるを恥」とした忠節の淵明像ができあがろう。劉宋の年号を用いなかったとの説、あるいは改名説など大いなる論争を生み出しているが、ともあれこの忠節像は蕭統（昭明太子）の「陶淵明伝」、『文選』二六巻の五臣注、『南史』隠逸伝へと継承されるが、現代の学者朱自清氏も「陶淵明年譜中之問題」[14]の中で説くように「南北朝、唐及び北宋は、けだし淵明を以て〝隠逸詩人之宗〟となすこと多し」であって、忠節の詩人像は次の偏安の南宋に至るまで脚光を浴びることはなかった。

北宋の蘇軾（蘇東坡一〇三七―一一〇一）は陶淵明を単に高潔無欲な「隠逸詩人」とするのみならず、李白、杜甫

をも凌ぐ、中国史上最高の詩人と絶賛した。岡村繁氏の『陶淵明』によれば、東坡の文壇における絶大な指導力、影響力とも相俟って、東坡のこの淵明観が定着し、作品も、今日のわれわれの共通の陶淵明イメージともなっている「五柳先生伝」、「桃花源記」、「帰去来兮辞」、「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」の名句を含む「飲酒」の第五首、の四篇が代表とされ、忠節の詩人像は副次的となる。たしかに蘇東坡は淵明の「読史述」中の夷斉、箕子について「けだし感ずるありていう。これを去ること五百余載なるも、われなおその意を知る」と短く言及するだけであって、伯夷、叔斉、箕子、荆軻といった忠節、節義をうたう淵明詩を重視しなかったようである。

ところが南宋（一一二七―一二七九）に至ると一変する。中国全土の統一を失ない長江以南に逼塞する南宋は東晋の国情に類似し、一方道学、朱子学の形成は名分論を抬頭させ、他方陸学、陸象山の学の存在は主体性論的立場から陶淵明の忠節を強調する（以下『彙編』による）。

まず南渡という屈辱を体験した南宋初期、蘇轍門下の韓駒（政和（一一一一―一七）中の進士）は、「述酒」の中の「山陽　下国に帰す」の一句に注目し、これを「義熙以後に感ずる所ありて作」ったものといい、陶淵明の「忠義」を高く評価した。ついで葛立方（紹興（一一三一―六二）中の進士）は、「読史述」中の「夷斉」、「箕子」、「魯二儒」に注目し、たとえば「夷斉」の「天人　命を革め、景を断ちて窮居す」などを引き、「淵明が身を窮巷にゆだね、黔婁（戦国時代の隠士）の貧に甘んじて悔いないのは二姓に事うるを恥とした」からであると見た。

朱子（一一三〇―一二〇〇）は陶淵明の詩に「平淡」と「豪放」を見、上に引いた沈約の『宋書』隠逸伝中の陶淵明伝の一文を次のようにパラフレーズした。つまり「陶元亮はみずから晋の世の宰輔の子孫たるをもって、また身を

後代に屈するを恥じ、劉裕簒奪の勢成りてより、ついに肯て仕えず」と。要するに朱子は沈約の原文が「潜弱年薄官、不潔去就之迹、自以曾祖晋世宰輔、恥復屈身後代、自高祖王業漸隆、不復肯仕」とあるのを、陶淵明に不利となる傍線部ⓐを省き、「陶元亮自以晋世宰輔子孫、恥復屈身後代、自劉裕簒奪勢成、遂不肯仕」と読みかえることによって忠節の淵明像を強調したのである。傍線ⓑの「曾祖」を省き、ⓓの「子孫」を補足したのは沈約の原義をそこなわぬものであるから肯定しうる改変であろう。また傍線部ⓒの「王業」を簒位の比喩と解するのは、すでに上文で沈約の原文を解釈したとき、われわれもまたそのように解してきた。傍線部ⓔのように端的に解することによって陶淵明の忠節像が増幅されよう。しかしにもかかわらず、朱子ほどの偉大な学者が傍線部ⓐを省き、「去就の迹に潔ぎよからず」との沈約の指摘を無視・省略して、ひたすら陶淵明の忠節像を強調したことによって、以後、次に述べる呉仁傑から現代の朱自清に至る多くの学者を迷わせた。沈約の原文は、そもそも、陶淵明が「去就の迹に潔よからず」であったのは、曾祖が偉大であったからであろう…と解すべきであろう。朱子の断章取義の罪は重いと言わなければなるまい。

呉仁傑（淳熙（一一七四―八九）の進士）は朱子の門人で、陶淵明研究に画期をもたらした『陶靖節先生年譜』の著者である。彼は「述酒」に淵明の忠義を見る韓駒に賛意を表し、淵明が作品に年号をつけたか否かの問題では、宋の永初以後年号をつけたものはないと理解するのがよいと指摘し、淵明は劉宋に至って名を潜と改めたと断じた。劉裕の簒奪に憤り、宋に入って名を「潜」（ひそむ、身を隠すこと）と改めたというのである。この改名説が「現在の中国では主流として定着しているかのごとくである」（廖仲安、上田『陶淵明伝』一六九頁以下）との指摘もある。

湯漢は陸象山の学を奉じ、象山書院で教えたことがある。同学に次にふれる謝枋得、学侶に王応麟（『困学紀聞』な

どで有名）がいる。湯漢は一二四一年南宋も末に書かれたその著『靖節詩注』の自序で、陶淵明の生き方、詩作の動機（特にわれわれの第四期アルカディアー期の作品について）を次のように鮮やかに指摘している。

淵明の異代（劉宋のこと）に事えずとの節義は張良の一族が五代にわたって韓の宰相となった忠義と同じである。ただ淵明は張良のように、祖国韓を亡ぼした秦の始皇帝を狙撃するという挙動にはでず、また張良のように、その志を託し実行に移しうる漢の高祖（劉邦）もいなかった。だから常に伯夷・叔斉の首陽山と荊軻の易水の間に心ひかれていたのである。

この指摘は、陶淵明が劉裕暗殺という直接的な政治行動もとれず、また君主に託して経世の大計を実行する政治改革の道（再建のユートピアの道）もとらず、ただ「述酒」の如き詩という武器で難解なレトリックの限りを尽くして、湯漢の言葉を使えば「乱えるに廋詞（隠し言葉、隠語）を以てして」、ひそかに東晋への「忠憤」の心情を吐露し、「千年もの間、読む者をして一体何を語ろうとしているか覚らせなかった」と論じた。とするなら首陽山と易水の間とはいっても、明らかに首陽山を中心に据えつつなお易水にあこがれたと言うべきであって、これこそ詩人たるの自覚をもって、非政治的な文詩を介して時の政治を鋭くしかも婉曲に批判する「アルカディアー」なのである。この問題についてはもう一度後文で論ずることにしよう。われわれはもうすこし淵明の忠節像を歴史の流れに沿いながら見ていこう。

謝枋得（宝祐（一一五三―五六）の進士）は湯漢と同学、象山の学を修め、忠義をもって自任し、のち宋元易代後、異民族・元朝の粟を食わず絶食して死んだ。『文章軌範』の作者で有名である。諸葛亮孔明の「出師表」と陶淵明の「帰去来兮辞」を最も美しい作品とみた（狩野直喜『支那文学史』一九七〇）。さて謝枋得の生きざまからすれば、当然陶

淵明の忠節が強調されよう。それが最もよく現れているのが、淵明の作品に年号・甲子を付けたか否かの問題であって、謝枋得は次のようにいう。

劉氏（劉裕）の庚子（四〇〇年）に政を得て、庚申（四二〇年）の革命に至るまで凡そ二〇年、淵明が庚子以後甲子のみつけ（て年号をつけなかっ）たのは、前もって将来は必ず簒位に至るだろうと知っていたからである。忠の至り、義の尽りである。

つまり陶淵明は劉裕の簒位を四〇〇年頃孫恩平定でわずかにその武名があがり始めた頃から予見していて、自己の作品に甲子（つまり年月）のみを記して年号をつけなかった、これこそ淵明の晋室への忠節の最たるものであると評価したのである（これについて、たとえば後の明代の郎瑛などは、二〇年も先のことを予見できる筈はないと反論している）。

謝枋徳の見解は、今日のわれわれから見るとやや誇大にわたり、忠憤・忠節の淵明像を極限にまで押し進めたものとして思想史的には興味深いものがあるとはいえ、信じ難い点がある。ともあれこの忠節の淵明像は、この後、元、明、清へと絶えることなく継承される。いま主要な人物に限って例挙しておこう（『志略』、『彙編』による）。詩中の鍵となる語句を括弧に入れておく。まず元代では呉澄（君臣之義）、趙孟頫（重道義）、虞集（君臣之大義）、呉師道（憤其主弑国亡）、陳繹曾（忠義）、明代では忠節像は余り強調されなくなるが、宋濂（清節）、王文祿（麦秀黍離之歎）、許学夷（悼国傷時之語）、胡応麟（六朝の文士に陶元亮をのぞいて節なし）、王圻（孤憤）、明末清初に黄宗羲（桃花源にふれて避地をいう―後述）、顧炎武（感憤之懐）、王夫之（何嘗一刻忘君哉）の三大遺老、そして朱鶴齢（恥事二姓之心）、呉松（忠君愛国）、惲敬（不臣二姓）、龔自珍（恩仇）、鐘秀（憂国）、譚嗣同（慷慨悲歌之士）といった清末の

人士にまで及んでいる。

忠節の淵明像は、われわれのいう第四期・アルカディアー期の作品、例えば「読史述」中の「夷斉」、「箕子」（四二〇年）、「述酒」（四二一年）、「詠荊軻」（四二三年）などから、晋宋「代謝」への憤りを、同じことであるが東晋への忠節を読みとることによって成立する。そして事実、多くの人々はこの「憤り」や忠節を淵明の詩から読みとった段階で思考を停止させてしまう。ところが湯漢は、すでに上文に見たように、餓死するか（首陽山の夷斉）、暗殺するか（易水の荊軻）、この二つの極限の間にゆれ動く淵明像を鮮やかに描き出し、陶淵明の本質はまさにこのアンビヴァレントな心理の上に、「述酒」でのような「廋詞」（隠語）をもって反劉宋の真情を吐露したところにあると見た。つまり湯漢は、①現実の政治過程に対して感懐をのべたとの単なる忠節の淵明像からさらに一歩を進めて、②詩的・文学的紛飾の限りを尽くして、詩文もてこの現実政治を自覚的に批判したところに「この翁の深く意を致すところ」があると見たのである。

いわゆる忠節の淵明像とこの湯漢のそれとの決定的な違いは、詩文をもって単なる感懐を述べたものと見るか、あるいは詩文をもって自覚的に現実を批判するものとみなすかの違いにある。もちろん単なる感懐であっても現実政治への批判は含まれよう。しかし自覚的に・意識的に・一貫して、現実政治への批判をこめているか否かという点が重要なのである。本論稿の第二節でアルカディアー期を設定したのも、四一八年以降陶淵明は深刻な自己反省のもとに、詩人としての明確な自覚をもって、現実の政治過程への批判を敢行した時期と見たからであった。湯漢はまだこの詩人としての自覚の背後にある桃花源・アルカディアーを発見していない。「述酒」、「詠二疏」、「詠三良」、「詠荊軻」の四篇に忠節を見るだけで、四一八年以降の一連の作品（その中に「桃花源記并詩」がある）の中にひそむ共通項をま

だ発見していない。悪しき現実に対置する対抗像としてのアルカディアー・桃花源を見出していないが故に、湯漢の立論は旧来の忠節像をぎりぎりまで押し詰めたその極限にあるとわれわれは見るのである。桃花源の発見はもう一歩なのである。これは同じ南宋の人洪邁によって別のルートから発見されることになる。

㈣ 国内亡命（インネレ・エミグラティオン）アルカディアー

隠逸はたしかに一見「逃避（エスケイプ）」[15]に見える。隠遁の理想とする桃花源も世俗から超在した静閑な、絶対平和空間に見える。しかし、われわれは桃花源に別の精神を見出そうとするものであって、その大前提は、すでに述べて来たように、「詩人としての自覚」である。官職に就き、その余技に詩を詠むのではなくて、詩作という文芸創作活動そのものに生きる意義を見出すこと、自己の詩境に自覚と自信をもち、もし可能なら宮仕えから身をひき、時の権力者からのほどこしを受けず、悪しき政治を峻拒し批判をもって生きることである。

われわれは陶淵明の思想が単なる田園詩（これすら六朝詩壇の作風からすれば詩人たるの自覚がなくば歌えない詩境である）から、批判・抵抗の桃花源へと発展、展開をみたと考える。第四期、アルカディアー期を設定したのも、彼のそのような思想的展開を重視したかったからである。およそ十余年、田園詩人としておのれの日常の感懐を自覚的に歌ってきた陶淵明が、ようやくおのれの外なる政治の変動に目を転じ、東晋末の政治の乱れ、劉裕の簒位という一連の政治的推移が、人間の願望する「安らぎ」の生活をもたらさぬ悪なる政治なのだと断罪するに至るのであるが、その場合、あくまでテーマを実話に借りて真実性を与えつつ、しかもそこに描かれた虚構の世界が現実の悪しき政治

とは正反対の理想の世界像であったなら、非政治的な文学による批判はその十全な役割を果したことになろう。

陶淵明は猟師が鹿を追って洞窟に入り別世界を発見するという、当時よく知られていた武陵蛮の伝承、あるいは劉驎之の山道に迷う話をその素材として使う。そしてそこに、やはり当時よく発生していた集団的「逃散」による「王税なき」理想的堡塢生活を描きこむ。かくてここに、時の政治・社会を批判する際の引照基準としての桃花源が出現する。詩人はかく詩文という非政治的手段によって、のんびりと桃花源・アルカディアーに憩うているとみせかけて、実は鋭く現実政治を批判し告発している。時代の証言者となっている。多くの人々は手段の非政治性、描かれた桃花源の美しさとその村人たちの行動の「逃避性」に幻惑されて、陶淵明の非政治性にひそむ政治性を洞察しえなかった。

現実の政治のあり方に幻滅を感じ、権力・政治に価値を認めることが出来なくなってしまった思想主体は、もしこの主体が詩人であるなら、詩文におのれの思想・意志を託する術をあみ出し、詩人としての自覚をもって現実の政治を眺め、それへの異議申立、それへの無言の抗議として自己の詩境を開拓していくだろう。ロールズを援用すれば、暗々裡に時の政府の命令を受諾しない「良心的忌避」[16]であり、ラスウェルによれば、権力に幻滅して政治から離脱する「脱政治的態度」、芸術や文芸の如き権力以外の価値を重しとする「無政治的態度」にほかならない。しかもダールの「非政治層」に関する分析は、政治体制がいかに理想的であっても、必ずや「非政治層」を生み出していることを明らかにしており、体制が専制的・権威的であったなら、この層の出現は必至となろう。『論語』微子篇の逸民（伯夷、叔斉）、隠者（長沮、桀溺ら）、そして『後漢書』逸民伝以降の正史の「隠逸伝」は、中国専制体制下での「非政治層」の存在を明示するものであり、彼らこそわれわれの政治思想史の文脈で語れば、後にも言及されるがナチス政権下の優れた学者、文学者たちのとった態度、国内亡命者、精神的抵抗者にほかならない。

しからば陶淵明の描く現実の対抗像としての桃花源・アルカディアーはいかなる世界か。われわれの文脈で留意すべきは次の四点である。

①実現の困難性。川→桃花林→山→洞穴というコースを辿って桃源に到達するところから、ここに桃のシンボリズム、洞穴から別天地へというモチーフを見る学説[17]もあるが、われわれは「初めは極めて狭くわずかに人を通す」に着目して、この体験が極めて個人的、極めて偶然的なもの、桃花源の実現困難性を説くものと解したい。「遂に迷いてまた路をえず」も、「のち遂に津を問う者なし」も結局は実現できなかったことを言うのであって、所在の不明性を言うのではない。つまりわれわれの前提である桃花源の現実批判性という観点を押しつめていくなら、桃花源の世界は悪しき現実政治（陽画（ポジ））の丁度逆の世界（陰画（ネガ））を指すものであるから、初めから自己の存在する「今ここ」hic et nunc に在らねばならぬことは自明の理なのである。従って如上の陶淵明の文の示すものは、現実の、政治批判の困難性、桃花源なる理想郷の実現困難性を言うにほかならない。

②現実の対抗像。老幼の生活すら十全に保証されて「自ら楽し」み、「秋熟　王税な」き、搾取なき、支配者なき小農村共同体である。養蚕、農耕による大きな生産力を誇るが、過度にわたらぬ、適度な豊かさが支配している。『老子』八〇章の「国を小さくし、民を寡くする」（「小国寡民」と訓まないことが重要）人為的に制限された小共同体、堡塢の世界であり、『抱朴子』詰鮑篇の政府なき国家でもある。現実の腐敗せる専制政治とは丁度逆の対抗像として理解すべきものである。田園のあるいは「逃避」の理想郷とかあこがれの仙境ではなく、思想主体が現実とのぎりぎりの対決の末に見出した極めて政治的な、抵抗の拠り所となる、あるべき社会像と見るべきであろう。

③安らぎ（オーティウム）。「桃花源記并詩」の中心テーマは何か。それは次のようないくつかの対（つい）概念を通じて暗示される。「淳薄」

つまり淳朴と浮薄の対比、「王税なき」世と「乱」の世俗、「怡然自楽」の村里と「塵囂」の世界との対比、それに加うるにより直接的なおだやかな農村の描写、こういった叙述から抽象しうる最も中心的な雰囲気は、「安らぎ」である。村人たちは「秦時の乱をさけ、妻子邑人をひきいてこの絶境に来」て、この共同体を作りあげたが故に、端初の歴史は持つけれども、それ以後、いわゆる歴史的時間は存在しない。俎豆も衣裳も古き昔のままであって、永遠に循環する無時間の中に安らぎ憩うている。これこそ詩人の求めて止まない精神の安らぎの場アルカディアーであり、淵明の言葉を使えば「棲遅(せいち)86」(安らぎ)、ロマニストE・R・クルティウスによれば「安らぎ otium(オーティウム)」[18]であって、これこそがアルカディアーの本質なのである。

④復合景観。「桃花源」はまず陶淵明の故郷である江西省潯陽、湖南省の武陵桃源、そして北方(洛陽や関中)の堡塢という様々な風景の合成であることである。唐開韶の『桃花源志略』は清の乾隆年間の僧、釈一休の『桃源洞天志』なる書から桃花源の実際の絵図を転載し、この図があれば「また迷途の歎あることなし」と断言しているが、これは今日ですらなお間々見受ける桃花源実在説に立つものであって、われわれはこの実在説には与しないものである。ウェルギリウスのアルカディアーが故郷のマントゥア、移り住んだナポリ、そして空想のギリシャのアルカディアー地方の合成風景であるように、桃花源も一つの理想化された空間なのである。従ってこの考え(アルカディアーは理想の空間との)をさらに押し詰めて、陶淵明の桃花源、ウェルギリウスのアルカディアーを徹底的に抽象化、概念化した、安らぎに満ちた心的世界そのものを指すと定義してもよい。

さて、この武陵桃源を唐代の詩人たちは仙境と見誤まったが、南宋の洪邁に至って「桃花源」に隠された真意が明らかにされる。

洪邁、紹興一五年（一一四五）の博学宏科で『宋史』によれば、「邁　文学尤も高く、立朝の議論最も多し」とあり、忠義を高唱した人である。その『容斎随筆三筆』巻一〇、「桃源行」におよそ次のようにいう。

陶淵明が「桃源記」を…作ってから、詩人は多く「桃源行」を賦うけれども、仙家の楽を称賛するにすぎなかった。ただ韓公（愈）は「神仙の有無　何ぞ渺茫たる、桃源の説まことに荒唐…」というけれども、淵明が桃花源記を書くに至った理由に論及していない。…私がひそかに思うに、桃源のことは「避秦」といい、「魏晋は論うまでもなし」というからには、明らかに劉裕のことが念頭にあり、これを秦に託して喩にしたものにほかならない。

かくて洪邁に至って初めて「桃花源記并詩」が劉宋を批判した詩文であるとの執筆の動機が明らかにされた。劉裕の非道の政治は秦の始皇帝の苛政と同じではあるまいか。秦をのがれてこの平和郷に辿りついた桃花源の村人のように、われわれにも安らぎの平和空間が是非ほしいものだと陶淵明は主張したと見るのである。洪邁のみるところ、陶淵明は晋から宋への混乱の時代に対置するに理想の桃花源をもってして、この政治過程そのものを批判したのである。洪邁は、単に劉裕の簒位を「憤る」だけではなく、さらに一歩進んで、そこにあるべき理想郷・武陵桃源を見出したとき、忠節の淵明像を超える、より普遍的な、われわれのいう「アルカディアー」を検出することができた。前節で検討したように、南宋では忠節の淵明観が主流であって、「桃花源記并詩」は、蘇東坡以来の田園の・隠逸の理想郷とみなされ、忠節あるいは反劉宋の観点からは注目されなかった。ところが洪邁は「桃花源記并詩」に注目することによって、この美しい田園詩の背後に、文学的・詩的な精神的抵抗と、その抵抗の拠点となるあるべき理想社会が提示されていることを読みとったのである。

「武陵桃源・アルカディアー」は、この遍安の南宋、そしてその次の王朝である異民族統治下の元朝の詩人に、時

に見出され、「避秦」をキー・ワードとしつつ、言外に体制批判を含む。唐開韶の『桃花源志略』に収める注目すべき作品を数例示す。王十朋（乾道七年、一一七一、六〇歳没）は、「和桃源図詩并序」で、「吏　門に到らず、租　輸せず」という「避秦」の子孫の住む理想の人境をうたっている。元代に至って、趙孟は「題桃源図」で、秦の悪政と対比させ、桃源を「況んやここ大平世、尭舜まさに在御す」と詠む。劉因は「桃源行」で「遺風百姓　長く泯びず、俗に君長なく、人熙々たり」と詠んでいる。

洪邁の説は、明の黄文煥（天啓五年（一六二五）の進士、官は日講官左春坊左中充）に至って、より鮮明になる。『陶詩析義』第四巻「桃花源記」の解説の全文を次に訳出して示そう。

これは宋を憤る説である。物語は太元中のことであるが、思うに太元中晋はまだ盛んであって、元亮のこの作品は晋が衰え劉裕が横暴を極めたとき（晋衰裕横之日）に当り、昔の事を借りて現在の恨を抒べたものにほかならぬ。「桃花源記」に「後遂に津を問う者なし」とあり、追述（過去に溯って述べる）の作たることが知られる。「桃花源詩」に「高く挙りて吾が契（意気投合の地、桃花源のこと）を尋ねん」とあるのは、避宋の思いを避宋になぞらえたのである。彼らは秦を避けてこの桃源に来たが、いまこの宋を避けようにも逃れる所とてない（避秦有地、避宋無地、奈之何哉）。その「記」に「魏晋は論うまでもない」とあるが、「いわんや劉宋など知らぬ」の意であり、「みな驚いて嘆息した」とあるは、王朝交代の悲嘆をいい、「外人の為に道うに足らざるなり」は避宋のむつかしさを知って嘆くことである。漁師のことをある者は神仙と考え、蘇東坡は桃源の村人を隠者の子孫とみなしているが、やや疑問である。元亮の創作の意図はひとえに寄託（かこつける）にあり、奇をてらい突飛な説を立てようとするものではない（元亮之意総在寄託、不属炫異）。

黄文煥のこの見解と「忠節の淵明」像との決定的違いは、この作品が虚構であることを黄文煥が洞察している点にある。「元亮の意は総て寄託にある」との指摘は、この作品が現在の政治悪をあばくためのフィクションであることを知悉していることを示す。またその違いは、「宋を憤る」からには晋への忠誠を誓うことになるが、黄文煥は淵明の晋への忠誠を全く言わず、むしろ「本朝すらなお肯て久恋せず、いわんや偽朝をや」（二疏、三良、荆軻詩の総合評、同上書巻四）と指摘していることである。一方への敵意は他方への忠誠を意味しようが、それを言わず桃花源という理想郷（伝統的解釈としては仙境）を提示することで、晋から宋に至る一連の政治的混乱こそ人々を不安に陥れ、人々を死に追いやっている。個人の安心、社会の平安を願う者にとってはむしろ晋宋の区別なく現在の政治的無秩序こそが糾弾の対象にならざるを得ぬ、という思想を表明している点にある。黄文煥の言葉を使えば、「晋衰」、「裕横」という二つの現象が「新恨」の対象となる。考えてみればむしろこれは当然であって、陶淵明が東晋の官界から身をひく「隠逸の宗」（隠逸は国内亡命者）であることに思いを致すなら、「裕横」のみならず「晋衰」にも批判的であったと解しうるのである。かくて黄文煥によって、桃花源は、①単に劉裕の簒奪を憤るだけではなく、②晋宋易代にともなう一連の政治的混乱そのものを告発する詩文であり、のみならず、③改めて現実政治の腐敗堕落を人々に気づかせるところの、淵明の願うあるべき世界の提示、であったと解されたのである。

「アルカディアー」なる思想的範疇の最大の特色は、国内亡命者による、詩文による現実批判と現実の対抗像（オーティウムに満ちた）の提示にある。

ところで黄文煥は、上文にみたように「避宋に地なし、これをいかんせん」といっている。現体制批判者に果して権力の及ばぬ安全な場所はあるのかという問である。明の遺老黄宗羲がこの問に一つの解答を与えた。「両異人伝」[19]な

る文である。崇禎一六年（一六四四）三月、統一明朝最後の皇帝、崇禎帝が自殺し、同年一〇月清の順治帝が北京で即位する。異民族満州人による中国統治の開始である。順治二年（一六四五）五月に南京をおとし、六月清朝は中国人に清への忠誠心のほどを試す次のような断髪令を下す。つまり、その「遵依者は我国の民となり、遅疑者は逆命の寇に同じ。必ず重罪に置かん」というもので、かく髪を切るか頭を切られるかの事態に直面して、漢人知識人はどう行動したであろうか。二人の特異なケース、「避世の最善なる者」を紹介すると黄宗羲はいう。

第一のケース。徐なる者剃髪に反対し、一六四六年宗族数十人と羊、鶏、牛、犬、野菜穀物の種、農具、織機など生活に必要なもの全てをそろえて温州の雁宕山に登り、登ってきた道を塞ぎ、数十間の家屋を建て、消息を断った。「昔、陶淵明は桃花源記を作った…その作品は寓言（虚構）であって秦の暴政を示くものである。…その当時は避地は易しかったが、今日では難しい。徐氏は虚構を事実にしてしまった（徐氏乃能以寓言為実事）」。

第二のケース。黄宗羲と同郷の諸士奇なる人物、南京陥落のあと、一三経、二一史をもって日本に渡り、諸楚宇と名のり日本の子弟を教え、「国師」、「真の相公」と尊敬されすでに三〇年になるが、帰国したようすはない（日本におけるこの諸楚宇の運命は？　興味ある問題である）。

黄宗羲はここで、「桃花源記」を虚構とみていること、「避地」つまり完全な国内亡命と国外亡命とを「避清」の最善の方法とみている点が注目される。ナチス政権下のドイツ知識人の行動様式を想起するまでもなく、この徐、諸二人のケースは、黄宗羲も認めるように、極めて特異なケースであって、ナチス政権下の多くの優れた知識人が徐氏の如き地を見出せぬまま国内に止まっていわゆる国内亡命を余儀なくされたように、実は黄宗羲自身が第三のケースを示すことになる。

黄宗羲は万暦三八年（一六一〇）の生まれで、明滅亡のとき三四歳、一六九五年に八五歳で没しているから、徐氏の如き「桃花源」なく、諸士奇の如く国外亡命もはからず、明朝滅亡後五一年もの長い間、異民族清朝のもとで一体どのように生きていたのであろうか。

崇禎帝自殺（一六四四年三月）の報が伝わると、明の遺臣たちは王室の一族を擁立して反清復明の軍事活動を行なった。黄宗羲の師である劉宗周は明の滅亡に殉じ、食を断つこと二〇日余にして没する（一六四五年六月）。黄宗羲も、はじめ南京の福王、ついで紹興の魯王に仕え、浙江一帯で実戦や献策を行なうこと五年余、一六四九年老母の身を案じて故郷に戻る。同志と別れ戦線から離脱したことについて彼はよほど心苦しく思い悩んだようで、ずっと後になっても、自分の行動を後世の人々が赦してくれるかどうかと嘆じている。これ以後、一六六一年、雲南の桂王がビルマで捕えられて反清の軍事活動が終焉するまでの一二年間、「わが身に賞金を懸けられたこと二回、指名手配を受けたこと一回、敵に町を囲まれて守備したこと一回、謀反のかどで密告されたこと二、三回、そのほかいろいろな事で捕方に追われない年とてない有様」が続く。一六六二年、康熙帝の治世とともにようやく学者としての平穏な生活が戻ってくる。黄宗羲五二歳の時である。以後没するまで三〇余年、何度も朝廷から招聘されるが明に忠誠を尽して清に仕えず、学を講じ、研究会を開き、また著作に専念した。

桃花源と国外亡命を「避世の最善者」と断じた「両異人伝」は黄宗羲六五歳ごろの回顧であるから、彼は反清の軍事活動や長い逃亡生活の間ですら、常に「最善」と考えられた先の二つの生き様を夢みつつ、それが不可能なるを知悉しているが故に、精神的な国内亡命を余儀なくされる。反清復明という現体制否認の志をいだき、官憲に追われる不安の日々のうちにあっても、なお安らぎの桃花源を思いつつ著作活動を続けたのである。黄宗羲の場合こそ、アル

カディアーなる思想的範疇の典型例と考えられる。ある政治体制のもと、体制に距離をおき、体制の収攬をしりぞけつつ、他方「最善」の桃花源を現在の政治悪に対置して非政治的な学問領域に専念して己の志を貫ぬくという極めて政治的な精神的態度である。この黄宗羲の生き方こそ、ナチス体制下におけるE・R・クルティウスらすぐれた知識人たちのとった生き方、精神的抵抗・国内亡命！　でもあった。

清代考証学は大きな流れとしてみるならば、黄宗羲の如き精神的態度をもつ「アルカディアー」的知識人によって担われたという一面を持とう。異民族支配下におかれた学者たちの、学問的権威に挑戦する知的営為が、直接孔孟・諸子に立ち戻るという非政治的・学術的態度によって、清朝正統教学たる朱子学の根底を掘り崩して行くのである。この清代学術の歴史を「復古による改革」（梁啓超『清代学術概論』）と名付ける説があるが、その担い手こそ「意識せざる反体制者」（黄宗羲ら明の遺老の持っていた反清精神の形式的継承者たち）であった。清末、満清体制の動揺は、この明の遺老の再評価へと向かわせるが、それはすでに忠節の淵明像で略述したように、「反清復明」の種族意識からする忠節の淵明像の強調ではあったが、「アルカディアー・武陵桃源」の復活ではなかった。「アルカディアー・武陵桃源」の復活は、遠く、魯迅の出現を待たねばならない。

魯迅の陶淵明への言及は全部で次の五点[20]である。後の叙述のために年代順に番号をつけると、

①「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」―一九二七年七月二三日、二六日

②「抜萃集」―一九三三年

③「隠士」―一九三五年

④「題未定の草稿　六」―一九三五年

⑤「題未定の草稿　七」―一九三五年

である。この五点は年代が隔っているものもあるが、一貫した問題意識で貫かれている。つまり、①で、これまで陶淵明は「完全に政治を超越した」田園詩人と見られてきたが、「政治にも注意を払っていたし、死をも忘れることがなかった」、「別な角度から研究すれば、おそらく彼は従来の説とは違った人物となることでしょう」と予言する。隠士の経済基盤を論じた③は、その「別の角度から」する研究の一端であり、②④⑤も論争の形式をとってはいるが、陶淵明の全体像をとらえようとする研究ノートの一部と見ることができる。

ところで①の「魏晋の風気および文章と薬および酒の関係」の書かれた一九二七年という年は、一九二五―二七年のいわゆる「大革命期」、その頂点にして転換点に当り、北伐の嵐のような成功が国共両党間の矛盾を拡大させ、ついに一九二七年四月一二日、上海における蔣介石の反共クーデター、上海の労働者・共産党員の五千人に及ぶ大虐殺が行なわれ、ついで南京に拠る蔣介石（国民党右派）と武漢に拠る汪精衛（共産党系）との対峙（一九二七年四月―七月の間）、さらに武漢反動（七月一五日分共会議）という第一次国共合作の完全なる崩壊の局面となる。他方、上海の四・一二クーデターに呼応して、「革命の根拠地」といわれた広東でも、李済深、銭大鈞らが四月一五日ついに反共クーデターにふみきり、共産党員や労働者二千百余人が殺され、逮捕され秘密裡に殺された者百余人、追放された鉄道労働者二千余人にのぼったのである。

一九二七年一月、広東に到着した魯迅は、中山大学文学系の主任教授として、新学期開講の三月一日から、「中国小説史」、「中国文学史」、「文芸論」を担当するが、この四・一五反共クーデターに抗議して大学に出講せず、四月二九日には辞表を出す。大学当局は学生の動揺を恐れて辞職を認めず、六月六日ようやくこれを受理する。魯迅は左派の

「戦士」とみなされて国民党にマークされ、生命の危険にさらされていた。この時すでに広東の共産党の組織、労働組合、農民組合といった政治勢力（政治のプロ）は完全に崩壊していて、今や武器なき・革命的・自由主義的・学者文人たち（政治の素人（アマ））が、狂暴にして、巧妙を極める白テロルの反動権力と直接に対峙するという局面になっていた（ナチス期の国内亡命者たちの状況との類似性に留意―後述）。

このような状況下で、一九二七年七月下旬に開かれた広州市教育局主催の夏期学術講演会は、魯迅に対する「踏絵」となる。「もし魯迅が拒絶すれば、彼が当局を尊敬しないという〝態度〟を表明したと認定」されよう。魯迅はまさしく「心に憤り」をもって、一九二七年七月二三日、二七日の両日「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」なる、大変興味深い題名の講演を行なう。この演題こそ、こういった態度こそ、学術的・非政治的な文学論で政権の反動性を告発し、かつ時は遠くへだててはいるが、全く同じ深意から構想・創作された陶淵明の「田園詩」・「桃花源」の中に隠された、（自分と同じ）鋭い政治批判を読みとるべきことを示唆した「精神的抵抗」の表明なのであった。この魯迅の思想と行動が、ミレニアムでもユートピアでもない、われわれの説くアルカディアー思想の本質なのである。魯迅は一九二七年九月広東を離れ、上海に向かい、「別の角度」からする陶淵明研究の一端を上記②③④⑤で断片的に発表するが、その一年後の一九三六年一〇月、五六歳で急逝する。

魯迅の未完の陶淵明研究は、国民党治下、日中戦争下、あるいは第三次国内戦争期、アルカディアー・武陵桃源を希求する古典学者たちによって、政治性を隠した、純学術的な装いのもとに、著実に継承され、今日の陶淵明研究の基盤を創り出している。いまその主要な学者の主要な業績[21]を次に示そう。

○朱自清　「陶淵明年譜中の問題」（一九三四）。

○陳寅恪　「桃花源記旁証」（一九三六）、「陶淵明の思想と清談の関係」（一九四三）。
○逯欽立　「陶淵明年譜藁」（一九四六）、「形影神の詩と東晋の仏教思想」（一九四七）。

朱自清氏がその著『標準と尺度』（一九四八）で回顧しているように、八年間の苦しい抗日戦争期でも、続く第三次国内戦争期にあっても、心に遙か「太平」（武陵桃源の世界！）の時代の到来を確信しつつ古典研究に傾注したと述べているのは、ナチス政権下のロマニストたちの知的営為に酷似し、われわれの説くアルカディアーの普遍性を明示するものである。一九四五年の早々、ヒトラー・ドイツの敗北を直前にしてルカーチはこう書く。「フランス大革命の恐怖時代のあと、シェイエス師にその間何をしていたかと訊ねたら、〝私は生きていた〟と答えたということである。これがヒットラー・ドイツの最もすぐれた、文学的に最も誠実な作家たちが誇りうる活動の、最も有利な結果である」。なぜか？「潔白」に生きぬいたことが「自由なドイツの再生」に「重要な、みのりの多い役割を演ずること」を可能にするからである。朱自清氏らの戦時下の研究の蓄積が、戦後の陶淵明研究の出発点となっていることは、すでにあまねく知られた事実であろう。

注

(1)　「史境」第二六号（一九九三・三）の私の論文「東晋の政治過程のいくつかの特質―劉裕簒位に至るまでの」参照。

(2)九品官人法については、さし当って、宮崎市定『九品官人法の研究』東洋史研究会　一九五六、越智重明『晋書』明徳出版社　一九七〇、頁二一以下。また矢野主税『門閥社会成立史』国書刊行会　一九七六、周一良『魏晋南北朝史札記』北京中華書局　一九八五の頁一〇七など参照。「不尽人才」は『通典』巻一四、選挙二。「上品に寒門なく…」は『晋書』巻四五、劉毅伝の「九品八損」の一。「上品に拠る者…」は『晋書』巻四八、段灼伝。

(3) 宮崎　前掲書。越智重明「魏晋南北朝の最下級官僚について」、「史学雑誌」七四―七（一九六五）。

(4) 法的、経済的特権については、さし当って、肖永清主編『中国法制史簡編』上　山西人民出版社　二七五頁以下。宋大渭主編『中国農民戦争史　魏晋南北朝巻』北京人民出版社　一九八五　一一四頁以下、蒲堅主編『中国法制史』北京光明出版社　一九八七　一二〇頁以下、周密『中国刑法史』北京群衆出版社　一九八五　二二一頁以下、羊聃のケースは『晋書』巻四九。

(5) 以下の「政治的無関心論」については、Robert A.Dahl,"Modern Political Analysis",Prentice-Hall,1976(1963), ff.100. H・D・ラスウェル『権力と人間』永井陽之助訳　創元新社　一九六九　一八五頁。Harold D. Lasswell and Abraham Kaplan, "Power and Society," Yale U.P., 1950, pp.145-146.

(6) 陶淵明の生涯をこの三期に分けるのは全くの通説となっているようである。古く李長之『陶淵明伝』（松枝茂夫・和田武司訳　筑摩書房　一九八三　原書初版は一九五三）、近時では都留春雄・釜谷武志『鑑賞　中国の古典　陶淵明』（角川書店　一九八八）など参照。また李文初『陶淵明論略』（広東人民出版社　一九八六）は「帰田前期（四〇五―一七）」、「帰田後期（四一八―二七）」と全四期に分けるが、思想的発展を重視していない。

(7) 陶淵明の作品とされているものにそのほか「四時」、「問来使」、「五孝伝」、「聖賢群輔録」、「搜神後記」等があるが、「淵明の著作でないと公認されている」（岩波文庫版『陶淵明全集』上の「凡例」）。しかし必ずしもそう断定できないようである。石川忠久『陶淵明とその時代』（研文出版　一九九四　一一二頁以下）の説得力ある文を見よ。

(8) 劉裕についての以下の記述は、吉川忠夫『劉裕　江南の英雄宋の武帝』中公文庫　一九八九（初版一九六六）、あるいは『資治通鑑』、『宋書』など参照。

(9) 「詩人としての自覚」とは時の文壇潮流に迎合せず独自の詩境をきり拓いていくことでもある。「彼はあえて六朝詩の主流をあゆもうとしなかった」（倉石武四郎『中国文学史』中央公論社　一九七三　四二頁）とか、陶淵明が新しい田園詩派を聞いた、といった指摘はこの「自覚」を意味するものと考える（近藤光男他『中国文学概論』高文堂出版社　一九八六　四五頁、金啓華他『中国文学史』江西教育出版社　一九八九　二八七頁など）。またその「自覚」は事実のみにとらわれることな

く、思想表現の最適の形式を追求して虚構（フィクション）に辿りつくということでもある。一海知義「陶淵明における〈虚構〉と現実」（『吉川博士退休記念　中国文学論集』筑摩書房　一九六八　頁一八九）、上里賢一「陶淵明における虚構のありかた(3)　「桃花源記并詩」を中心にして」（「国文学論集　琉球大学法文学部紀要」第二五号　一九八一）、魏正申『陶淵明探稿』（北京文津出版社　一九九〇）は陶淵明の「自覚的文学創作意識」を論じている。

(10)　廖仲安『陶淵明伝』上田武訳注　汲古書院　一九八七　頁一二二。なお上田氏の補説は博捜をきわめる勝れた業績と思われる。

(11)　われわれの思想的範疇としての「アルカディアー」は陶淵明の桃花源の意味するものと同義であるが、ウェルギリウスの「牧歌」の方が早く世に出たこと、「桃花源」なる言葉は日本語としてやや俗に流れすぎることから「アルカディアー」を用いることとする。なお高橋徹『陶淵明ノート』（国文社　一九八一　頁一三、三六）が、「桃花源」をユートピアとも千年王国とも異質と洞察したのは卓論である。

(12)　ある作品は事実問題としてある特定の時期に作られたものであるが、作家の主体的創作意欲とその歴史的環境の与える刺激との相互関係は極めて微妙であるから、その成立期が明記されていないものの推定年月は大まかとならざるを得ない。以下の年月推定論もそのような限界を認めた上での立論であること言うまでもない。

(13)　中国歴代の桃花源論ならびに陶淵明像の変遷については、さし当って、大矢根文次郎『陶淵明研究』早稲田大学出版部　一九六七、岡村繁『陶淵明　世俗と超俗』NHKブックス　一九八四、都留春雄・釜谷武志『鑑賞　中国の古典　陶淵明』（既出）、廖仲安『陶淵明伝』上田武訳注（既出）など。その基本資料として『陶淵明詩文彙評』北京大学中文系文学史教研室教師・五六級四班同学編　北京中華書局　一九六一（本文中で『彙評』と略称）、『陶淵明研究資料彙編』北京大学・北京師範大学中文系教師同学編　北京中華書局　一九六二（以下『彙編』）、唐開韶輯・胡焯編『桃花源志略』道光二六（一八四六）年序刊本、台北広文書局有限公司　一九七六影印（以下『志略』）。

(14)　『陶淵明年譜』北京中華書局　年譜叢刊　一九八六　二六七頁。

(15) 隠逸を逃避と見る説はきっぱりと否定されなければならない。隠逸に脱政治的な「国内亡命・精神的抵抗」(Innere Emigration) を見ようとするわれわれは、根本誠氏の名著『専制社会における抵抗精神』(創元社　一九五二) に依拠する。しかし李長之『陶淵明伝』(邦訳二一七頁)、王遙『陶淵明集』(四頁)、そして近時、唐満先『陶淵明集浅注』(一五六頁) に至ってもなお「消極逃避」をいう。

(16) ジョン・ロールズ『正義論』矢島釣次・篠塚慎吾・渡辺茂訳　紀伊国屋書店　一九七九　二八五頁以下。「アルカディアー」は市民的不服従の最もマイルドな形態の一つである。

(17) 高橋徹『陶淵明ノート』(既出) 四七頁以下、小川環樹『中国小説史の研究』岩波書店　一九六八　二二七頁以下など。

(18) クルティウス『ヨーロッパ文芸批評』川村二郎他訳　紀伊国屋書店　一九六九　一一頁。ローゼンメイアーは「田園詩のオーティウムは…逃避主義者の心理過程ではない」と指摘している (Thomas G. Rosenmeyer, "The Green Cabinet", Univ. of California Press, 1969, p.68.)。

(19) 陳乃乾編『黄梨洲文集』北京中華書局　一九五九　七九―八〇頁。「両異人伝」は清の文字獄を考慮して生前に出版した文集には収められていない。下文の断髪令は蕭一山『清代通史』巻上　台北商務印書館　一九六一　三一四―一五頁。黄宗羲の生涯については、恩師故山井湧先生の『黄宗羲』(講談社　一九八三)、同『明清思想史の研究』(東京大学出版会　一九八〇) に全面的に依拠した。

(20) 魯迅と陶淵明については、さし当って、廖仲安『陶淵明伝』二六九頁以下の上田氏の補説、竹内好『魯迅評論集』岩波文庫、丸山昇『魯迅』平凡社　一九六九など。

(21) 清華大学教授朱自清(一八九八―一九四八)については、『朱自清古典文学論文集』(上海古籍出版　一九八〇) などの「出版説明」や小野忍『中国の現代文学』(東京大学出版会　一九七二)、『中国現代文学事典』(東京堂出版　一九八五) など。広州嶺南大学教授陳寅恪(一八九〇―一九六九)については、『紀念陳寅恪先生誕辰百年学術論文集』(北京大学出版社　一九八九) 所収の蔣天枢「陳寅恪先生伝」参照。東北師範大学教授逯欽立(一九一一―七三)については、李盛平主編『中国近現代

人名大辞典』（中国々際広播出版社　一九八九）。なお下文朱自清の回顧は『標準与尺度』（北京三聯書店　一九八四　一頁、初版は一九四八年）、G・ルカーチ『ドイツ文学小史』道家忠道訳　岩波書店　一九五一　二一八頁。